

きらきら星とてまり唄（介護のなかにある詩）

中村 敬子

介護の当事者となったとき、それまでの人生には無かった様々な問題と直面して戸惑った。一昨年父を、その数年前に母を看取り、しばらく時間がたつて振り返ってみると、歌どころではないような時でも、ただ単純に歌は消えずに支えとなり、生きる力となっていたことに驚く。行政の力の及ばないところで介護当事者に寄り添える可能性を持つ短歌の存在感を、現在実感している。この感覚がまだ生々しくあるうちに、介護と短歌について考えてみたい。

両親の介護に行き詰まり、介護関係の本を読み漁った。そのなかの一冊、大井玄『病から詩がうまれる 看取り医がみた幸せと悲哀』のあとがきに次の一文がある。

こちらを寄せ付けぬ病と老の姿に接して生じる想いには、苦さと、無力感と、悲しさと、申し訳なさの味がついていました。この想いは論文では表現できません。酒で想いを紛らわせる時期も続きましたが、いつのまにか老・病・死についての詩歌を探すようになっていました。

終末期医療で見た人生の真実と詩歌を結びながら、大井自身も短歌と俳句を詠むようになる。「苦さと、無力感と、悲しさと、申し訳のなさの味」は私自身の気持ちとも重なり、

少しだけ楽になれたのを記憶している。

まず家族から愚痴混じりの病人の様子を聞き、ぼつねんと正座している着物姿の認知症女性を型どおり診察する。

(同)

母屋と別の離れに、ひつつめにした白髪頭をうつむけて悄然と一人座る姿をみて、一瞬足を止めたこともありません。

(同)

本文中のこういった診察の場面の描写から、ふとある一首が鮮やかに浮かび上がってきた。

つくねんと日暮れの部屋に座りをり過去世

のひとのごとき母親

永井陽子『てまり唄』の巻頭歌である。

一 永井陽子『てまり唄』に見る介護と孤独

巻頭、一首のみがそれこそつくねんと置かれ、母親の座した姿が見える。この母親に病があるかどうかは論外で、「過去世のひと」の一言で現実からずとんとイメージの世界へ移行する。生きていながらも過去世のひとのようというこの比喩に、時間を超越した老いというものの正体が一瞬見えなくなるようだ。ページを捲りながら、まるで古家の襖をひく

ような気持になる、珠玉の巻頭歌と言える。

永井はこの『てまり唄』で、初めて私性の強い作品を曝すとあとがきに書いた。確かにそれまでのフィクションの世界とは違う色となっているが、私はこの歌集に老いや介護から生まれる詩を感じる。

さみどりの風がクサタラクサタラクと吹く日
になれば歩まむ母も

中村草田男の次の一句を意識していると思える。

万緑の中や吾子の齒生え初むる

若草色の風が吹く頃には、齒の生え初めた子供のように母も歩くことが出来るようになるだろう、という永井の歌には子供の生と老人の生が見えないところに並列されていて、それぞれの時間が風のように流れている。俳人名をオノマトペとして使うことよって出来上がった二重構造。たとえ草田男がわからなくても草という音が隠れていることで一面の緑を感じる事が出来る。結句の歩まむで、今は歩けないという事実がわかる。杖や車椅子といった道具を使わずに、もの哀しく美しい調べの中で介護を詠っているのだ。

つつましき日をくりかへし雨の季がまた来

ぬ 母の箒も湿る

かりそめにこの世にありて何とせう 立つ

たまま夢を見てゐる箒

竹箒あたらしく買ふ寒の日の老いたる母の

とむらひのため

箒の歌三首はそれぞれ歌集の中ほどから終わり近くに置か

れていて、読後この箒が心に残った。一首目は母の日常の道具としての、二首目は母あるいはもっと広い意味での人生の比喩としての箒。そして三首目のあたらしく買う竹箒では母が亡くなっている。これらの歌は心情を具象に託す表現となっている。地味で古めかしい箒が、母のこれまでの人生と死を象徴しているのである。

ボケというのは、もしかしたら老人たちのやむをえぬ自己防衛なのではないのか。町も歩けず、激しい変化についていけないお年寄りたちは、居心地の悪い現実からもうおりてしまうことにより、自分だけの平安を得るのではないだろうか。『モモタロウは泣かない』

永井はエッセイでこのように言っている。暖かく、かつ冷静な見方だと思う。歌を詠む、文章を書くという行為は、介護の渦中にあっても心の俯瞰性を保たせてくれる。幸いにもエッセイが残っていたことで、一層『てまり唄』全体の理解が深まった。

そんな私の周辺で、かぞえうたでも歌うように、母は少しづつ老いていった。 (同)

たましひを奪われてなほ生き継げる老人が
この朝に鞠つく

かぞへうたかぞへかぞへて石段をくだれば

おのがこころの中ぞ

とろとろ子とろ子を盗らるれば鬼になると

薙けし母に言ひたるは誰

母がめそめそ泣く陽だまりやこんな日は手

鞠つきつつ遊べたらよし

てまり唄手鞠つきつつうたふゆゑにはかに

老けてゆく影法師

これらの歌は自然と歌集全体に音楽性を生みだす。『てまり唄』は『モーツアルトの電話帳』と同時期に読まれた作品である。フィクションにこだわった永井だが、どちらにも音楽性があり、『てまり唄』には童歌にみられる五音音階の哀愁ある響きが内在している。母の生きた時代、生き様。そして両親の晩年の子として生まれ、もの心ついた頃にはすでに眼前にあった老いと向き合ってきた自身の孤独感はこちらでいたフィクションでは表現しきれない厳しいものであり、それらと自分の世界観との凌ぎ合いの末に生まれた、ノンフィクションを再構築したフィクションこそが永井が初めて曝した私性なのではないか。永井の繊細な神経と美意識にとつては、苦しいものであったに違いない。

あさがほがしづかにほどく藍を見き身の丈

ほどの範囲を生きて

この静かな一首は永井の生き方そのもののように思える。「ほどの」という絶妙な曖昧さが人生を築にしてくれるはずであったが、この後は遺歌集となってしまう。永井の孤独感については、鈴木竹志『孤独なる歌人たち』―永井陽子の歌―に論じられている。鈴木は、「他者を受け容れないという永井の孤独こそが、真の孤独なのではなからうか。」と解き明かしている。永井は孤独な介護を終えたあと、さらに深い孤独に絡めとられてしまったのであろうか。そう考えると、

介護は救いであつたのかもしれないと思える。

二 小島ゆかりの愛の歌

小島ゆかりの介護の歌はすでに第一歌集から登場する。二十代終わり頃から現在に至るまで介護は小島から離れない。

ここでは第十歌集『さくら』を中心に述べていきたい。

歌集後半の時期はとりわけ、鬱病と認知症の父の歌ばかり詠み、もうそれ以外の歌はできないのではないかという恐怖を繰り返し味わいましたが、それでも、歌を作ることがわたしに新しい気力をもたらしてくれました。このなかの何首かでも、介護の歌ではなく愛の歌として読んでいただけることがあつたら、歌も私も幸せに思います。

(『さくら』あとがき)

小島の第八歌集に『ごく自然なる愛』がある。この、愛という言葉が無防備に使いこなせる歌人は多くないだろう。介護の歌ではなく愛の歌として読んでほしいという。小島と私は同年代なので、リアルタイムに響いた。介護のその行為のみに関心が集中して、介護の根底部分、つまりなぜ介護をするのかという肝心部分を私は忘れていたのである。

ちちはははひとつふくろのなかにあてふく

らみしばみ老年の秋

老齡の姑ははおもひ母おもふとき きらきら星

の歌うたひたし

不自由の人に自由のこころあり去りゆく今

日の風に手をふる

一首目、老年の両親というのは、しだいに二人でひとつと

いう雰囲気は濃くなる。狭くなっていく世界で互いに支え合
い、そして争いもすることをふくらみしほむと表現したので
あろう。ひとつふくろのなかにいるという捉え方は、突飛な
のだが腑に落ちるものだ。

二首目のきらきら星の歌は、永井のでまり唄と比べて明
い。が、明るいゆえの寂さがある。俯いて手鞠をつきなが
ら歌うてまり唄と、夜空を見上げるきらきら星。そこに二人
の歌の方向性の決定的な違いがあるが、音楽性は共通のもの
がある。

三首目の普遍への飛躍、しかもまったく平凡な言葉だけで
形成される非凡な世界は小島独特のものだ。目に見える不自
由と目に見えない自由のどちらも肯定し、流れやまない時の
間に吹く風を見つけている。去りゆく今日の風が見える自由
のころは穏やかである。永井がエッセイで語っていた「自
分だけの平安を得る」ことに通じよう。こういった追及して
ゆく捉え方は、次の三首にも言える。

歯ブラシをえんぴつと言ふ父とゐて歯ブラ
シはいつかえんぴつになる

できること少なくなりてできることのよろ

こびふかき父に五月が

カステラをこぼしこぼしてまどかなる黄金きん

の空気につつまるる父

認知症の父ある日々はそのほかの憂ひごと

みな忘れてのどか

歌の内容はどれも切ない。歯ブラシをえんぴつと言ひ、で

きることは減り、カステラをこぼす。こういった現実のみに
焦点をあてると作者も読者もがなじがらめになるが、小島は
そこに詩を見ている。歯ブラシはえんぴつとなり、少ないよ
ろこびはふかくなり、こぼしたカステラは黄金きんの空気となる
のだ。単純に負と生の数に例えてみると、負を受け取り、負
のなかに生をみとめ、負正混沌としたところから詩を掬い上
げては自然体に言葉を発すること。それが小島の言う愛の歌
の意味なのではないだろうか。

四首目は、大きすぎる憂いに支配された状態をのどかと言
う。つまり負から生を導いているのだ。哲学的、あるいは仏
教的でもある。現実と真実、現象と本質の違いが明らかにこ
れらの歌にあり、そこに至るまでの深い思索の道のりを感じ
る。

三 介護と歌の未来とは

冬桜しろく咲くべし娘らが老いしわたしを

もてあます日も

『折からの雨』

私はこの歌が小島の覚悟に思える。われわれ介護人かいごびともやが
ては守られ人となる。その時短歌は、詩は、どのように生ま
れるのであろうか。何が解るのであろうか。

永井陽子の時間は残念なことに止まってしまった。が、ま
だ眠っているであろう永井の作品が、再びこの世にでる永井
の未来を願う。小島の歌のこれからを、歌心のこれからを、
見つめ続けることを自分への宿題として、遠くの山を眺める
ように歌と関わっていきたいと考える。